神様のおもちゃ箱

仁科治

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
神様のおもちゃ箱

【Ｎコード】
Ｎ１０８９Ｌ

【作者名】
仁科治

【あらすじ】
「氷のような固まりが胸の中にあって、それがどうしても溶けないのですよ。あの人をどうしても受け入れられないんです」

2　「氷のような固まりが胸の中に」

2　「氷のような固まりが胸の中に」

私は叔母との会話を反芻した。

……こちらだって、生活に余裕があるわけではない。私は数年前に会社を辞め、収入が不安定になっていた。いま、働いているとは言っても、穴埋めのような雇用の形態になっていた。子どもたちの学費がかかったから、家計に余裕はないはずだった。

友人の何人かの顔が浮かんだ。少し前までは大きな企業にいることを自慢げにしていたが、ここのところのリストラや賃下げが響いているらしく、みな先行きを気にしていた。退職金の話も出て、どうするという顔つきで互いをうかがっていた。親の話も出たが、どうしたいという話まではだれも立ち入ろうとしなかった。私たちは、いつしかそんな年代になっていることに気づいていた。

私のほうがもっと苦しい。そのことも叔母に話そうと思ったが、やめた。

しかし、財政的なことは大きな理由であったが、私には別の思いがあった。私には、父を拒む気持ちが強かったのだ。

「氷のような固まりが胸の中にあって、それがどうしても溶けないのですよ。あの人をどうしても受け入れられないんです」

私は、叔母にこう話した。

素直な気持ちだった。むしろ、こう落ち着いて話せる自分に驚いたほど冷静だった。しかし、このような言い方が叔母に理解できるとも、まして納得させられるとは思っていなかった。

「お姉さんだって、あの人のおかげでずいぶん嫌な思いをしたでしょ」。私は叔母を「お姉さん」と呼んで育った。近所ではずいぶん歳の離れた姉弟と思われていたらしい。叔母はそれを嫌がる様子はなかった。

電話機の前で私は、ずいぶんぼんやりとしていたらしい。妻が台所で大声を上げているのに気づいた。

「どうしたのよ、ぼうっとして」

妻は青ざめていた。このごろ変よ、とつぶやいて下を向いた。水が流し台を激しく打つ音が台所から響いてきた。

私は、妻の肩越しに黒い影がこちらを窺っているのに気づいた。どこかで見たような顔だった。だが、思い出せない。

影の動作はひどく醜く、不快な感じにさせた。水音に揺れて、笑っているような、怒っているような顔つきだった。

玄関でチャイムが鳴った。

「ほら、帰ってきたじゃない」

妻の手の動きは、さらにせわしなくなった。

食卓に三人分の茶碗が置かれた。テレビをつけると、毎週見ている日曜のドラマが始まっていた。

夜半、頭が激しく蹴飛ばされた、そんな衝撃で飛び起きた。立ち上がっても、頭のなかで血液の揺れが収まらないようだった。心臓が高鳴っていた。部屋をかき回すような騒音が走り回っていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1089l/

神様のおもちゃ箱

2010年10月28日03時24分発行